國學院大學学術情報リポジトリ

# 近世近代における接尾辞「み」：結合の拡大と衰退



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-06<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 杉本, 裕子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000911 |

# 近世近代における接尾辞「み」
## ―結合の拡大と衰退―

杉本裕子

### 一　はじめに

接尾辞「み」は、「さ」と同様、形容詞の語幹に結合して名詞化する働きを持つ。「み」と「さ」とは主に現代語で対照研究がいくつか行なわれており、意味用法の差異についての指摘がなされている。それらにおいて、「み」は自由な結合力を持つ「さ」に比べて結合に制限があり、「み」の結合した語は「重み」「やわらかみ」「おもしろみ」など固定した一語として扱われるとされ、どの形容詞に「み」がつくかということも詳細に検討されている。

しかし、現代語では「安定した一語」と自明とされることであっても、それは最初から安定したものでなく、歴史的に「ゆれ」があった上で定着したものである。

古代から用例が多く見られる「さ」に対して、「み」は形容詞に付いてそのような状態を表す名詞をつくる用法としては古くは語例は少ない。しかし近世や近代には「やさしみ」「うつくしみ」など現代語としては一般的でない語例がいくつか見られ、また近年では漢語に付く例が増えるなど、その結合の様相は変化している。

小稿は、現代語では安定した結合を残すのみとなった接尾辞「み」の近世近代の用例を調査し、その史的研究を試みるものである。それによって、現代語における「み」の性質もより明らかになるのではないかと考える。以下、接尾辞そのものについては「み」、語基と結合した形のもの

は「―み」と表記する。

## 二　「み」についての先行研究

先行研究では、現代語における接尾辞「み」について、「み」が限られた形容詞につくことから語基となる形容詞の種類ごとに分類し、個々の語例を挙げて「さ」との比較を交えて考察されているものが多い。

「み」の性質について述べたものでは、〈対象から把握される主観的な状態や、感情・感覚を、総体的・全一的な状態概念として表す〉（森田一九八九）〈そのような感覚や感情の内容の体言化〉〈その語の表す事柄の内容・質にまで立ち入った指示標識〉（森田一九九六）というのが代表的なものであろう。『日本語教育事典』の「み」の項（薗田英津子氏執筆）では「み」は〈それぞれの語の属性観念を抽象し固定化して表す。「～と感じさせるもの」「～（という）感じ」「～味わい」「ほかのものと比べて一層～と感じる状態」の意〉〈「味」はあて字だが、「み」には味わい、趣きの感じがある〉とまとめられている。

一方、「み」が結合する形容詞、しない形容詞について考察しているのが小出（二〇〇〇）である。「み」は形容詞で表される性質・状態を実質的に持っているということを表現するもので、〈「～み」の付く形容詞は、客体として存在するモノの属性を表すもの〉〈「～み」で表される属性を持つ対象は、内部性を持つもの〉〈「～み」は、その内部の特質に起因すると想定される属性を表す〉といい、その性質上「み」のつかない語例として、「若い、悪い、暗い、正しい、貧しい、長い、短い、太い、細い、広い、狭い、古い、新しい、美しい、激しい、やさしい、難しい、詳しい、大きい、小さい」等を挙げている。

黄（二〇〇四）は、「み」のつく語基の範囲の狭さは、「み」に言語主体の主観的側面が含まれているためであるという。日本語は客観的にモノゴトを把握することが好まれ、モノゴトだけでなく人の内面に立ち入ってとらえることがはばかられる傾向がある。その結果、「み」がつくのは慣用的用法・語彙化したものだけとなり、派生語数は減る、とする。また現代日本語における「み」の造語力の衰えについて、「み」は語基と結合して意味が固定化し意味領域

が狭まっていることと、「さ」が「み」の意味領域に侵入してきていることの二点を指摘している。

これらは現代語における「み」の特徴であるが、歴史的にはどうだったのか。古代語では限られた語しか見られないが、用例のある程度見られるようになる近世や近代では、現代語の「み」とは違った様相を見ることができるので、それを確認し、接尾辞「み」の変遷をたどってみることにする。

## 三　接尾辞「み」を扱う際の問題点

接尾辞「み」を国語史的な観点から扱うにあたっては、いくつかの問題点がある。ここで扱う「み」の範囲について明らかにするため、問題点を挙げる。

### 1．「―む」型動詞連用形

先行研究では、「楽しみ」「悲しみ」「苦しみ」等も、動詞連用形の名詞化であるという可能性を示しつつも、「み」の結合した語例に含めて扱うものがほとんどである。確かに形式上は「形容詞語幹＋み」であり、特に「さ」との対比を考える場合、これらの語例についても検討するのは妥当であろう。しかし、これらを語構成上接尾辞「み」の結合したものと扱ってよいかどうかは問題が残る。確かにもともとの造語意識がどうであったかを窺うことは困難であるし、動詞の名詞化か、「形容詞語幹＋み」か、見解の異なる場合もある。[1] また「み」が結合の範囲を広げていった要因の一つとして、動詞連用形からの転成名詞の存在があったことも想像される。例えば「悲しみ」等動詞の連用形名詞の形から見て、形容詞語幹と形が共通しているため、「形容詞語幹＋み」で名詞化するという類推が働いたのではないかと考えられる。

しかしここでは接尾辞「み」と形容詞との結合の広がりを見るのが目的であり、また歴史的に、現代語には見られなくなっている語形を確認することを重視したい。そのため、動詞連用形の名詞化と見るのが妥当と思われる、少なくとも動詞形が古語でも現代語でも存在する「楽しみ」「悲しみ」「苦しみ」「親しみ」「痛み」「憎み」等は、用例に含めないこととする。言うまでもなくこれらは古くから見ら

れる語であり、動詞との直接の対応のない「―み」の語例の出現とは差がある。このことからも、史的な立場から考察する場合、両者は別に扱うべきであろうと考える。なお、「懐かしみ」「凄み」等も動詞形が存在するが、形容詞が先行するものであり、「み」が結合する語例も後発すると認められるので、接尾辞としての用例に含めておく。

## 2．古代語の「み」との関連

古代語では、いわゆるミ語法の「み」、また「―みす」「―み思ふ」の形をとるものなどがあるが、接尾辞とするかどうかは見解が分かれるところである。ミ語法の「み」と接尾辞「み」になんらかの連続性がある可能性もあるが[2]、本稿ではミ語法については立ち入ることをしない。

古代語では、形容詞語幹につく場合、「明るみ」「高み」「深み」など特に「そのような状態の場所」を表す。その「み」が意味を抽象化させていき、「そのような点」さらに「そのような性質」を表す働きを持つようになったと考えられる。

「み」が古代語のそれよりも意味を広げ、結合の幅も広がった時期を明らかにまではできないが、ロドリゲスの『日本大文典』には、形容詞から名詞を作る方法としての接尾辞「み」についての記述が見られ、「黒み」「白み」「浅み」「深み」「甘み」「青み」「広み」「狭み」「高み」「低み」「繁み」「強み」「弛み」「痛み」「赤み」「憂み」「惜しみ」が語例として挙がっている。『日葡辞書』にも、「赤み」「黒み」「強み」「弱み」「苦み」「辛み」などの例がある。中世には、「そのような状態の場所」を表す以外の用法としては、色や味覚を表す形容詞につくものが多いようである。本稿では、場所を表す例は考察に含めず、「み」が名詞をつくる接尾辞としての用法を広げた例を扱う。

## 3．「味」という表記について

接尾辞「み」を含む語例の中に、「味」と漢字表記されるものがある。現代語でも、「甘味」「渋味」のように味覚を表す語のほか、「滑稽味」「人情味」など特に漢語に付く場合に多い。これらはそのような味わいを表しているという意識から、「味」という字が用いられるのであろう。そうするとその場合の「味」は漢語接尾辞と見ることもでき

るが、もとはあて字として「味」の字が用いられ、それが拡大した結果とも考えられるので、ここで漢語接尾辞「味」を認めるかどうかは保留にしておきたい。ただし、後で見るが「味」という表記がなされたことによって、「み」自体の用いられ方になんらかの影響があった可能性はある。

以上のように「み」の考察には問題点も多いが、これらを踏まえたうえで、次章から近世近代の「み」の状況について見る。

## 四　近世の「み」

### 1．近世前期

近世前期の資料として、『近松全集』（岩波書店）『新編西鶴全集』（勉誠出版）を使用し、「み」の結合した語を調査した。得られた語は次のものである。

〈近松〉あやしみ1　うまみ1　かたみ1　涼しみ1　苦み2　弱み3

〈西鶴〉青み1　赤み4　うつくしみ2　重み1　長み4

特に現代語には見られない「ーみ」の使用状況を中心に、近松の例から見る。以下用例の掲出にあたり、表記を改めたところがある。

①故に日本に生るゝ者は。十六の夏迄は。両袖の下を闕腋（けつてき）の脇あけにして熱をもらし。涼しみを受されば国と人と相応せず。

（「日本振袖始」全集一〇巻四六八頁）

②それでも髭はいやで有ふ。いやでない〳〵ほうずりの。跡がひり〳〵して後のかたみ忝い。

（「嵯峨天皇甘露雨」全集九巻八五頁）

③太刀取検使つめかけ候上はすご〳〵とは帰り候まじ。横笛が命は中宮様の御おしみ。滝口をさがし出し其方にて首討れよと申べきかと云ければ。

（「娥歌かるた」全集八巻七〇三頁）

④恋しやな。思はずこゝに。うかれきて。名もなつかしみ桃園の。夫の年は二十あまり

（「日本西王母」全集三巻一八八頁）

①は、「涼しさそのもの」ということを表現するために、「程度」を感じさせる「涼しさ」ではなく「み」の形をとったのであろう。「かたみ」は「堅苦しい様子」を表す場合

もあるが、②の「かたみ」は実際に触って固いと感じるものである。③「おしみ」④「なつかしみ」は形容詞に対応する動詞形もあるもので、しかも用例を見ると「―み」の例とするのは適当でないかもしれない。これらは「み」がついていても、名詞形として安定した形でないという印象である。[3] 次に西鶴の例を見る。

⑤子細は、今からさへ鬢付のいろこく、首筋はへぎはまで、此うつくしみ、ならひなき太夫になるべしと、

（「男色大鑑」全集二巻三七〇頁）

⑥今のうつし絵もいにしへを見つたへて、八重桜の陰に入日くれなひの袴に、十二ひとへの紋柄のうつくしみ。

（「新可笑記」全集三巻五五五頁）

⑦首筋立のびて、をくれなしの後髪、手の指はたよはく、長みあつて爪薄く、足は八もん三分に定め、

（「好色一代女」全集一巻五一一頁）

⑧惣浅黄こんがうをはきてすり足にあゆみ、しめつけ嶋田髪先も跡も長み同し事にして、中程に平鬢（ひらもとゆい）をかけ

（「西鶴俗つれづれ」全集四巻四九六頁）

「うつくしみ」は美しい状態や度合というよりも、そのものが持っている美しさそのものを表現しようとしたものと考えられる。⑦の「長み」は見た目に長いと感じられる様子を表しているが、⑧の「長み」は測定可能な長さのことである。「―さ」と「―み」では違いが見られるのかどうか、「うつくしさ」「長さ」の例も挙げてみる。「うつくしさ」は二十一例あったが、「長さ」は一例のみである。

⑨跡より二十あまりの面影、窓のすだれのひまより見へけるに、其うつくしさ、和国美人そろへのうちにもみへず。

（「西鶴諸国ばなし」全集二巻七二頁）

⑩其船行水につれてさしくだし、上人川の塩さかひ、岸は青柳のしげり、汀わづかに足くびたけ、ひさがしらの立所に、長さ五丈横弐丈はかりもありし、くれなゐの細引網をおろして

（「色里三世帯」全集三巻二六五頁）

「うつくしさ」は、比較を前提とした、美しさの度合をさす場合が多い。⑩の「長さ」は、具体的な寸法とともに使用されている。小出（二〇〇〇）は、次元形容詞の場合、対象の立体的な内部空間をイメージさせる形容詞（「深い」「厚い」）に「み」がつくという。「長み」は西鶴には四例見られるが、定着することはなかった。

## 2．近世後期

江戸後期の資料は、『洒落本大成』（中央公論社）を使用した。江戸、上方別に示す。

〈江戸〉青み4　赤み1　甘み3　ありがたみ2　うまみ24　おかしみ44　おとなしみ3　重み1　おもしろみ35　かたみ1　からみ2　くさみ2　黒み1　こわみ1　白み1　高み3　つよみ8　苦み9　はずかしみ1　深み3　ふるみ1　ほそみ1　やわらかみ7　弱み4

〈上方〉あいらしみ1　あたらしみ1　甘み1　いやしみ3　うまみ11　おかしみ8　おそろしみ1　重み2　おもしろみ14　くさみ4　しゆみ2　白み2　つたなみ1　苦み1　やさしみ3　弱み1

現代語でも安定している語はここでも用例数が多いが、自由な結合も見られる。「み」の用法において注目すべき点として、「旨味」「甘味」等味覚を表す語がいくつか見られ、「味」の字があてられているものがある。また洒落本には「おかしみ」「おもしろみ」の用例が多いが、これらはそのものの実質的な面白さを抽出して示そうとするものであり、一語として安定したもので、「趣き」や「味わい」そのものを意味する場合もある。中でも「面白味」という表記のものがあるのが注目される。「味」という表記と「み」とが結びつくことによって、そのものの「味わい」「趣き」を表すものとして意識されたのではないかと想像される。このことはまた、「み」が接辞として意識されているものと見ることもできる。

⑪江戸座の俳諧は種〳〵に替つてゆくから面白味がありやす

（「志家居名美」〈江戸〉大成二九巻一六六頁）

⑫俳優（わざおぎ）ならぬ業（わざ）くれは。世間の哂落の裏を行キ。端出縄（しりくめなわ）の横なまれる。夷振（ひなふり）の可笑味（おかしみ）にして。天照の神吹出させ。しかも磐戸の差合なく。笑う門には福来る。

（「田舎芝居」〈江戸〉大成一三巻三一八頁）

また、「み」と「味」の結びつきの背景には、例えば「美味」「厚味」「風味」など、「漢字一字＋味」の語の存在もあったのではないか。これらは味覚を表すものもあれば、「趣き」のような意味を表す場合もある。「―味」の形をとる語彙から「味」の使用が広がり、和語の「―み」の意味と重なっ

ていくのではないかと考えられる。

その他の現代語では一般的でない用例を挙げる。

⑬気に引くらへてとはわが事ッたは。フウどふやら今になつては。甚さンに怖みか増して。むりくせつに切たひのだな。（「芳深交話」〈江戸〉大成九巻二九九頁）

⑭此度南客丈第一はんめ芝幸の役にて座敷のとりまはしすへておとなしみのしうちこまかいところがみへます（「花折紙」〈江戸〉大成二二巻一五九頁）

⑮常の老奴（おやぢ）という事を嫌ひ女は雑談（ざうだん）に凝りて男の肝をはかれば男却てやさしみを含み（「粋行弁」〈上方〉大成補巻一六四頁）

⑯うこうイヤ〳〵是を幕に雷子（らいし）が景物とせうのち八コリヤ旦那大あたらしみとみへまする（「当世嘘の川」〈上方〉大成二三巻六二頁）

これらは「さ」で表すこともできそうな例もあるが、さらにそのものの持つ実質的な性質、状態を抽出して提示したものであるとともに、「み」によって「趣き」を表現しようとしたともいえる。しかしこれらは用例が少なく、現代語に定着しているものは、「うまみ」「おかしみ」「おもしろみ」など、すでにこの期に用例の多く見られるもののみである。

## 五　近代の「み」

近代の例は、『作家用語索引』（教育社）を用いて、夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介、太宰治、志賀直哉の用例を検索した。「―み」の用例数は次の通りである。「み」が「味」と表記されているものもあるが、一覧には和語につくものは「み」として挙げておく。

〈漱石〉あおみ（青・蒼）9　あたたかみ（温・暖）15　新しみ3　厚み1　甘み1　ありがたみ4　おかしみ2　おそろしみ1　おもしろみ7　重み19　臭み1　黒み1　さびしみ（さみしみ）7　凄み1　強み4　懐かしみ4　苦み3　丸み3　優しみ1　弱み9

〈鷗外〉青み3　赤み1　あたたかみ（温・暖）2　新しみ1　甘み1　ありがたみ1　重み3　黄いろみ1　渋み1　凄み2　強み3　苦み2　深み1

やわらかみ1　弱み2

〈芥川〉赤み1　重み2　深み1　弱み2

〈太宰〉重み1　強み1　苦み1　弱み2

〈志賀〉青み4　赤み1　温かみ2　厚み3　おかしみ1　おもしろみ1　重み6　臭み1　黒み1　丸み2　愛嬌味1　芸術味1

この中では夏目漱石の作品に「―み」の例が目立つので、近代に「―み」を多用した作家として漱石の例を見ることにする。『作家用語索引』は底本が明らかでないため、用例は『漱石全集』（岩波書店）で確認して掲出する。

漱石には、「み」を「味」で表記するものが多い。「可懐（なつかし）味」「恐ろし味」「重味」「丸味」「新し味」「温か味」の例もあり、「み」を接辞として意識していたことが窺える。[4]

⑰此顔から受ける僕の心持は、何と云つて可いか殆んど分らないが、永久に相手を諦らめて仕舞はなければならない絶望に、ある凄味と優し味を付け加へた特殊の表情であつた。（「彼岸過迄」全集七巻三一五頁）

「凄味」は一語として熟した語でもあり、「凄さ」とは置き換えできない。「優し味」は、「優しさ」とすることもできるかもしれないが、「み」の形をとることで、より「優しさの実質」を示そうとする表現となっている。

漱石では、特に感情を表す「―み」の例が多い。「み」で表現されるものは主観的とされるが、小出（二〇〇〇）は、「み」は対象の内部にあるものを表すもので、感情形容詞の場合、現代語では「ありがたみ」「おもしろみ」「おかしみ」「悲しみ」のように対象の持っている性質を表す語に「み」がつき、「うらやましい」「なつかしい」「うれしい」「こわい」など主体の側にある感情の場合にはつかない、とする。

漱石には「なつかしみ」「おそろしみ」「さびしみ」「ありがたみ」という例がある。漱石の、感情形容詞と「み」の結合はどのような意味を持っているのか、作品中「さ」「み」両方の形の見られるものを比較してみたい。漱石の感情形容詞につく「み」の例のうち、現代語としては一般的といえない「さびしみ」と、それに対する「さびしさ」に注目してそれぞれの用例を検討する。「さびしさ（さみしさ・さむしさ）」は十二例、「さびしみ（さみしみ）」は七例であった。このほかに「物さびしさ」も一例ある。

まず、「さびしい」という感情が、主体の側にあるものか、対象が感じているものかという点に注目してみる。

⑱其所で別れる時、彼女は幌の中から、前に行く人達に声を掛けた。けれどもそれが向ふへ通じたか通じないか分らないうちに、彼女の俥はもう電車通りを横に切れてゐた。しんとした小路の中で、急に一種の淋しさが彼女の胸を打つた。

（「明暗」全集一一巻一八七頁）

⑱は主体が実際に感じた「淋しい気持ち」をいうものである。このようなものは八例ある。

⑲「おれは御前の叔父だよ。何処の国に甥を憎む叔父があるかい」市蔵は此言葉を聞くや否や忽ち薄い唇を反らして淋しく笑つた。僕は其淋しみの裏に、奥深い侮蔑の色を透し見た。

（「彼岸過迄」全集七巻三一六頁）

⑲の「淋しみ」は、『作家用語索引』では「淋しさ」となっていたが、『漱石全集』の本文に拠って、「淋しみ」の例としておく。これは「淋しい」のは主体である「僕」ではない。「淋しみ」とすることで、対象の感じている「淋しさ」を客観的に感じとったものと解することができるもので、二例が認められる。しかし次のように、対象の感じている淋しい感情を「淋しさ」で表すものも二例もある。

⑳何時でも斯んなに遅いのかと尋ねたら、笑ひながら、まあ左んな所でせうと答へた。代助は其笑の中に一種の淋しさを認めて、眼を正して、三千代の顔を凝と見た。

（「それから」全集六巻二〇五頁）

また次の例のように、「淋しさ」は淋しげな情景を描写するのにも用いられるのに対し（二例）、「淋しみ」は、抽象的な観念として、淋しいという感情そのもの、あるいはその淋しさの内実を表現する（五例）。

㉑唐代の衣冠に、蹣跚の履を危うく踏んで、だらしなく腕に巻きつけた長い袖を、童子の肩に凭した酔態は、この家の淋しさに似ず、春王の四月に叶ふ楽天家である。

（「虞美人草」全集四巻二九一頁）

㉒私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう。

（「こころ」全集九巻四一頁）

このように見ると、「淋しさ」は「淋しさを感じた」の

ように主体が実際に感じるもの、または「淋しい様子」を表すものであり、「淋しみ」は客体の中に「淋しい」という感情を第三者が感じ取ったもの、あるいは「淋しさ」よりも抽象化された、「淋しい」という感情、観念そのものを凝縮して提示したもの、とある程度整理できる。

しかし、ここで明確な使い分けを示そうとすると恣意的な解釈となる惧れがある。古賀（一九八九）で〈時代によって又は個人の好み、意図で敢えて「み」を使う語感への「こだわり」も存在する〉と述べられているように、「淋しさ」と「淋しみ」、あるいは「―さ」と「―み」の使用は、作家の個人的な感覚や意図によるところも大きいのではないかと思われる。「淋しみ」は、調査対象としなかった他の近代の作家にも見られるものであるが、定着しなかったのは、この「―み」が、明確な意味領域を獲得できなかったということだろう。感情形容詞にはつきにくい、ともいえる。

このように漱石に「み」の用例が目立ち、鷗外にもいくつか見られるが、太宰、芥川の作品ではわずかであり、造語力が弱まったと見られる。と同時に作家による偏りもあると推測され、漱石は好んで「み」を使用したということはいえるだろう。

名詞を作る接尾辞としてはすでに「さ」があるが、盛んな造語力を有する「さ」によらず接尾辞「み」が必要とされたということは、「さ」では表現できない意味がそこに求められたということである。特に文学作品においては、ある状態、性質の実質を「み」で提示し、そこに「さ」では表現できない何らかの「趣き」を与えようとしたのかもしれない。

このほか「―味」の形をとる漢語として、鷗外には「快味」、漱石には「艶味」「雅味」「苦味」「詩味」「臭味」「情味」「俳味」「妙味」「涼味」の例がある。「味」の接するのが独立性の高い語の場合は、接尾辞のついた例としてよいと思うが、これらは一概に接尾辞の例とはいえない。志賀直哉にはまた「―み」の例がやや多く、「愛嬌味」「芸術味」と、漢語熟語に「味」の結合した語も見られた。[5] これは名詞に結合する例でもあり、漢語の名詞や形容動詞につく例は、調査範囲を広げれば更に多く見られることになるはずである。このように「味」で表記される場合は特に「味わ

い」「趣き」といった意味が強く感じられ、漱石に多い「和語＋味」の例もそのような意味合いが感じられる。現代語では和語に「―味」と表記されることは少なく、「和語＋み」の場合、「味わい」「趣き」といった価値が現代語では薄れたといえ、そのことが造語力の衰退にかかわっている。

## 六　結―「み」の造語力の衰退

形容詞語幹等に結合して名詞化する接尾辞「み」の近世近代の例を見てきた。接尾辞は、結合力の変化とともに、接尾辞自体の意味の変化も認められる。「み」は、古代語の、限られた形容詞について「そのような状態の場所」を表すのを原義とし、「そのような部分、点」を表すものとして抽象化された結果、対象の内部にある性質の実質を引き出して提示するという働きが認められるようになったと見られる。さらに「味」との結びつきによって「趣き」の意が添えられ、結合も広がりを見せたものの、現代語では再び固定した結合のみに収束することとなった。

「み」の造語力が衰退することになったのは、「さ」との関係があるであろう。「み」が結合の幅を広げると、類似した働きを持つ「さ」の領域に接近することになる。ここで見たように、「さ」と「み」とで表現価値が異なるとしても、作家によって意図的に「―み」が使用されることはあるが、多分に個人的な好みが反映されるものであると思われる。「み」は「さ」との差別化のため、散発的に見られる語例も定着することがなく、限られた、一語として固定化したものだけが残ることとなったのであろう。

さらに、「み」が「味」と表記されることにより、現代語では「味」は漢語との結合に偏り、そこに「趣き」「味わい」の意が意識されるが、和語の場合はその限りではない。そのことも衰退の一因であろう。現代語の「み」と「味」を同じ接尾辞として扱ってよいか、ここに問題がある。漢語との結びつきについては今後の課題としたい。

ここでは近世近代に見られる語を中心に見たが、現代語に見られない語とともに、現代語にも変わらず使用される語もあったことも確認しておきたい。「み」の基本的な性質自体は変化したわけではない。

以上、近世近代の例を通して「み」の史的変遷の一端を

観察した。

**注**

（1）例えば「いとおしみ」は、『日本国語大辞典第二版』では〈形容詞「いとおしい」の語幹に接尾語「み」のついたもの〉とし、源氏物語若菜下「女君、消え残りたるいとおしみに渡り給ひて、人やりならず心苦しう思ひやり聞え給ふにや、と思して」が初出例として挙げられている。一方『古語大鑑』では〈動詞「いとおしむ」の連用形の名詞化形〉とし、同じ用例を引く。

（2）小出（二〇〇〇）、黄（二〇〇四）では、接尾辞「み」とミ語法の「み」の連続性が示唆されている。

（3）近松以外の浄瑠璃に、次のような用例が見られた。「み」がかなり自由な結合をしている例といえるが、あるいはミ語法の影響もあるか。

帝様さへもの事が自由にならいで。成忠様と諸共に押込られてござるじゃないか。あなたから見てはこちらが術なみは何でもない。（「源平布引瀧」日本古典文学大系『浄瑠璃集下』一〇〇頁）

（4）『日本国語大辞典第二版』「み〈接尾〉」の項の補注に〈漢語の「味」と混同して意識され、「味」をあて字として用いることも、近代には多い〉とある。

（5）『作家用語索引』の「語構成による見出し対照表」は、語末の構成要素から見出し語を引くことができるものであり、「み」のついた語例を確認することができるが、動詞からの連用形名詞と、「快味」「詩味」のような「漢字一字＋味」の例は拾えない。「愛嬌味」「芸術味」は拾える。

**〈参考文献〉**


影山太郎（一九九三）『文法と語形成』ひつじ書房

小出慶一（二〇〇〇）「形容詞の意味の一側面―「～まる」と「～み」のつく形容詞」『群馬県立女子大学国文学研究』20

黄其正（二〇〇四）『現代日本語の接尾辞研究』溪水社

清水邦子（一九七八）「接尾語―「み」と「さ」を中心に」『ILT News』64

森田良行（一九八九）『基礎日本語辞典』角川書店

森田良行（一九九六）『意味分析の方法―理論と実践―』ひつじ書房

古賀知子（一九八九）「コミュニケーションに及ぼす接尾辞「さ・み」の語感論理の働きについて―親の有難さと有難みはどう違うか」『九州大学留学生教育センター紀要』1
権藤早千葉（一九九四）「形容詞の派生名詞「～み」について」『福岡ＹＷＣＡ日本語教育論文集』6
『日本語教育事典』（一九八二）大修館書店

**〈調査資料〉**

『近松全集』（岩波書店）『新編西鶴全集』（勉誠出版）『洒落本大成』（中央公論社）〈江戸〉当世座持話　古今吉原大全　評判娘名寄草　論語町　遊婦多数寄　両国栞　寸南破良意　里のをだ巻評　婦美車紫廚　風俗問答　娼妃地理記　中洲雀　傾城買指南所　当世左様候　金枕遊女相談　美地の蠣殻　酔姿夢中　蚊不喰呪詛曾我　百安楚飛　野路の膽言　女鬼産　深淵情　多佳余宇辞　噺之画有多　客者評判記　初葉南志　弁蒙通人講釈　芳深交話　根柄異軒之伝　大通俗一騎夜行　翻草盲目　口学諺種　雲井双紙　神代椙昧論　大劇場世界の幕なし　舌講油通汚通点興　蛇蛻青大通　歌舞妓の華　角鶏卵　太平楽巻物　客衆肝照子　福神粋語録　田舎芝居　古契三娼　吉原やうし　自惚鏡　夜半の茶漬　格子戯語　仕懸文庫　取組手鑑　客物語　廓節要　品川楊枝　猫射羅子　松登妓話　白狐通　意妓口　五臓眼　玉之帳　遊僊窟烟之花　二筋道宵之程　雨夜噺　廓肝競商内神　後編にほひ袋　青楼娭言解　青楼日記　八幡鐘　五大力　南門鼠帰　花折紙　三人酩酊　佳妓窺　挑燈蔵　面和倶噺笑屁録　通言東至船　通客一盃記言　四季の花　京伝居士談いろは雛形　楼上三之友　青楼胸の吹矢　花街寿々女　花街鑑志家居名美　魂胆情深川〈上方〉列仙伝　開学小筌　玄々経夢中生楽　色里つれ〳〵草　間似合早粋　肝相撲　浪華色八卦虚辞先生穴賢　千字文　浪花花街今今八卦　粋宇瑠璃　寒暖寐言　粋の源　破紙子　北華通情　粋庖丁　粋のすじ書　来芝一代記　十界和尚話　野暮の枝折　当世嘘之川　北川蜆殻　当世廓中掃除　粋行弁『作家用語索引』教育社　『漱石全集』岩波書店（一九九四年版）